

みんなの Justice

社会倫理の視点から在留外国人・
先住民をめぐる制度の狭間を考える

討論者：奥田太郎

(南山大学社会倫理研究所第1種研究員・倫理学・応用倫理学)

司会者：ウイニバルドス・ステファヌス・メレ

(南山大学社会倫理研究所第2種研究員・国際人権法・企業人権)

国際的な法枠組みをめぐる昨今の議論において、
「Access to Justice」がキーワードになっている。
「Justice」は、日本語では「正義」と訳されることが多いが、この言葉には「司法」や「公正」といった意味もあり、「Access to Justice」の「Justice」の射程は、思われているよりも広い。
作家やなせたかしが、悪を倒すヒーローではなく「自分の生活を守ってくれる人」に正義を見出したように、私たちは、「Access to Justice」の問題圏を考えるにあたって、日本における「正義」概念の射程を今一度問い直す必要があるだろう。
他方で、「access」の含意も実は自明ではない。様々な不正義に晒される人たちの尊厳の回復を支える制度が整っているだけでは、「access」が保障されているとは言えない。たとえば、その制度がもたらす負の側面もあれば、整備されたはずの制度に実質が欠けていることもある。制度の運用に伴う様々な見えにくい問題に光を当て、その問題を解決に導かなければ、十分に「access」が保障されているとは言えないだろう。「Access to Justice」をめぐって、問題の所在が剔抉された第一波、問題に対処する制度的対応が進展した第二波の後、一見して捉えにくい社会的・文化的・倫理的な次元に関わる問題を拾い上げる第三波が現在、到来している、と見ることもできるだろう。

こうした認識のもと、今回のシンポジウムでは、3名の提題者を招き、「Access to Justice」を「みんなのJustice」と捉え、マイノリティと呼ばれることの多い在留外国人、先住民がそれぞれに直面している課題を取り上げ、それぞれの課題（とくに〈制度の隙間〉）に伏在する「Justice」および「Access」の問題に迫りたい。

第一報告

「構造的暴力と心理的回復」
～在日コリアンの心理臨床から考えるJusticeへのAccess」

朴希沙

(在日コリアン・カウンセリング&コミュニティ・センター公認心理師/臨床心理士・臨床心理学)

第二報告

「コスタリカ先住民の事例から考える」
「Access to Justice」

額田有美

(南山大学外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学
科講師・先住民学、共生学、人類学)

第三報告

「正義とJusticeの概念や含意を問い直す」
哲学・倫理学の観点から考える」

吉田修馬

(上智大学特任准教授/上智大学
生命倫理研究所員・哲学、倫理学)

2026年
6月20日(土)
14:00-17:30
(受付開始13:30)

南山大学
G棟G30教室



みんなの Justice

講演概要 & 講演者プロフィール

社会倫理の視点から在留外国人・
先住民をめぐる制度の狭間を考える

第1報告

ばく きさ
朴 希沙 Kisa Park

構造的暴力と心理的回復

～在日コリアンの心理臨床から考えるJusticeへのAccess

心理的苦悩を社会的不正義との関係から捉え、構造的暴力が回復過程に与える影響を検討する。Trauma-Violence Informed Careの視点を踏まえ、在日コリアンへの心理臨床実践を通して、歴史・社会・個人を統合的に理解する視点が、動的な回復とJusticeへのAccessの条件となることを論じる。

プロフィール

〈略 歴〉 立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。日本学術振興会特別研究員、女性のためのカウンセリング機関等での勤務ののち、2020年に在日コリアンカウンセリング&コミュニティセンター(ZAC)を開設。現在はZACでのカウンセラーの他、病院での心理士、大学での非常勤講師などを務める。

〈専門領域〉 在日コリアンに対する心理臨床、歴史的トラウマ、マイクロアグレッション

〈主要著作〉 『歴史的トラウマと日常を結ぶ心理臨床: 在日コリアンに対する実態調査と臨床実践』明石書店、2026年。

第2報告

ぬかだ ゆみ
額田 有美 Yumi Nukada

「コスタリカ先住民の事例から考える“Access to Justice”」

本報告では、中米コスタリカの先住民居住区の事例を紹介する。具体的には、「先住民の権利」を保障する目的で国家の裁判制度に導入された司法鑑定と、その一方で公的に容認されるようになった先住民居住区内の慣習法的紛争解決の実践に焦点を当て、両者がどのように機能し、どのような問題が生じているのかを報告する。

プロフィール

〈略 歴〉 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学、大阪大学)。国立民族学博物館外来研究員(PD)、大阪大学人間科学研究科助教を経て、2023年より現職。

〈専門領域〉 人類学、ラテンアメリカ地域研究、先住民学

〈主要著作〉 『先住民とデジタル化する世界』春風社、2025年(分担執筆)など。

第3報告

よしだ しゅうま
吉田 修馬 Shuma Yoshida

「正義とJusticeの概念や含意を問い直す: 哲学・倫理学の観点から考える」

英語の「justice」の訳語には、正義や正当性や公正性(規範)、司法や裁判(制度)、行為への報いといった語が考えられる。ある種の正義を説明する際に、同じものを同じように扱う「平等性(equality)」と、違うものを違いに応じて扱う「公平性(equity)」を大別することもある。他方で日本語の「正義」は、社会的・客観的な意味では「justice」とも重なるが、個人的・主観的な道徳的正しさの確信という意味では「righteousness」に近いかもしれない。「正義」と「justice」の異同の背景にあると思われる哲学・倫理学の議論の一端を概観することで、正義やjusticeが、誰にとって、どのような課題について、何を基準や原理として、どのような対応を求めるものなのかを考える一助にしたい。

プロフィール

〈略 歴〉 2012年、慶応義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、2012年、東京大学大学院医学系研究科特任研究員を経て、2019年4月より現職。

〈専門領域〉 倫理学・倫理学史・応用倫理

〈主要著作〉 『テーマで読み解く生命倫理 改訂版』教育出版、2026年(共編著)。「共生の倫理と思想」「人権の思想」文京学院大学編『人間共生論入門』ミネルヴァ書房、2024年(分担執筆3-38頁)。「Self-love in Butler and Rousseau」, D. Arie et al., eds, *Joseph Butler: A Preacher for Eighteenth-Century Commercial Society*, Springer, 2024 (分担執筆 pp.129-146)など。

討論者: 奥田太郎
(南山大学社会倫理研究所第2種研究員(倫理学・応用倫理学))
司会者: ウィニバルドス・ステファニス・メレ
(南山大学社会倫理研究所第2種研究員(国際人権法・企業と人権))